

シャーロック・ホームズの魔術と詐術 —二十世紀小説として『バスカヴィル家の犬』を読む

島 高 行

はじめに

まずは死体。そこへ名探偵が登場し、死体の身元を解明し、犯人を割り出して拘束し、事件は解決する。これが探偵小説¹の典型であろう。日常に生じた異常事態の結果である死体に直面にして混乱する人々を前に、常に冷静な探偵が合理的な推理によって事件を解決し、犯人をつかまえ、その動機や犯罪の方法が明かされて、再び平穏な日常が回復する。このような探偵小説の冒頭に置かれ、その後の物語の展開を決定づけるのは、言うまでもなく殺人という犯罪である。「殺人という語りえない出来事」について、田中純は次のように論じている。

それは象徴的現実統合することのできない外傷的な事件であり、探偵は失われたこの物語を再構成することによって、正常な象徴的現実へとそれを再統合しようとする。言い換えれば彼は、因果律が破綻しているかのように見える殺人の現場という光景を遡行的に再現し、そこにもまた正常な因果律が支配していることを証明する。推理小説の冒頭に出現する屍体とはすなわち、世界を支配する因果律を逃れる例外の表象なのである。(田中191)

探偵小説においては、日常生活に突如出現した異常な事態である殺人、そしてその結果である死体は、特定の犯人の動機という原因が引き起こした例外的出来事にすぎないのだと探偵によって説明されるのである。

こうして探偵が特定の犯人を名指しすることによって、犯人以外の容疑者の無罪が証明されることになる。ここで、探偵小説の存在理由が、特定の個

人を罪人とすることで、「罪が非個人的なものであり、したがって集団的、社会的なものかもしれないという疑いをはっきりと消し去る」(モレッティ 98) ことにあるとする Franco Moretti の主張に注目したい。モレッティが同書で挙げている例を紹介するなら、Agatha Christie (1890-1976) の最初の探偵小説 *The Mysterious Affair at Styles* (1920) では物語の時代設定が第一次世界大戦中であるにもかかわらず、関心は戦争で行われている大量殺戮ではなく、スタイルズ荘の二階で起こる殺人に限られているという事態である。知的ゲームとしての探偵小説が成立するためには、その舞台を限定する必要があるわけだ。

探偵の捜査活動によって、人々の中に身を潜めていた犯人は罪人であると名指しされ、社会的処罰を受ける。その結果、その他の人々の潔白が証明されたことになる。こうして「社会はその統一性を肯定し、再び、自らの無罪を宣言する」(モレッティ 110) ことになるだろう。その時探偵小説は、自らが「文化が持つ抑圧力への賛歌」(モレッティ 108) であることを示すのである。

しかし社会に安心感を与えるはずの探偵小説の事件解決が、「決して答えない問いに対して与えられた、探偵自身の幻想のシナリオ」(田中196) であったとしたらどうだろうか。この問いを、探偵小説の中でもっとも有名で古典的な作品にぶつけてみたい。それが Arthur Conan Doyle (1859-1930) の *The Hound of the Baskervilles* (1902) である。*A Study in Scarlet* (1888) での初登場以来、ドイルに名声と収入を与えていたシャーロック・ホームズ・シリーズが1893年にいったんピリオドが打たれた後、二十世紀にはいって再び雑誌連載が始まったこの作品でホームズはどう変わったのか、そして彼は何を解決し、何を問題として残したのか、こうした問題を本稿でこれから論じていくことにしたい。

I

『バスカヴィル家の犬』は1901年に雑誌 *Strand Magazine* で連載が始まり、翌1902年に単行本として出版された。つまりこの作品は、ヨーロッパ中心史観や植民地主義を鋭く批判した Joseph Conrad の *Heart of Darkness* (1902) (ただし雑誌 *Blackwood's Edinburgh Magazine* での初出は1899年。) と同じ年に出版された20世紀小説ということになるわけだが、この事実には違和感を覚えざるを得ないだろう。田舎の名門一族の遺産相続にかかわる争いだとか、一族にかかる呪いだとか、『バスカヴィル家の犬』の内容はヴィクトリア朝小

説の色彩が濃く、アナクロニズムの感は否めないからである。それでも当時の読者は『バスカヴィル家の犬』の登場を熱狂的に迎え、連載の間、『ストランド・マガジン』の部数は毎号3万部ずつ売り上げを伸ばし、通常18万部の売り上げが30万部にまでなった。さらにいち早く雑誌を手に入れようとする人々が押し寄せ、編集部に入った建物の周りを長い行列が取り巻いたという（ノウン41）。世紀が変わっても、あるいはヴィクトリア朝が終わっても、人々のメンタリティーがすぐに変わるわけではないということだろう。

この熱狂的反応の背景には、Sherlock Holmesの久方ぶりの登場であったということがある。ホームズ・シリーズの作者としてしか認められないことにうんざりしたドイルは、ホームズを死なせる決意を固めた。宿敵 Moriarty 教授とともにスイスのライヘンバッハの滝壺にのみこまれたホームズの最期が描かれた‘the Final Problem’が、1893年『ストランド・マガジン』に発表されると、「全国的大パニック」（ノウン18）に近い反響を呼び、ドイルを非難する手紙が大量に編集部に届けられた。その中にはドイルを「人でなし」と呼ぶものまであった。

しかし、『バスカヴィル家の犬』の連載開始がホームズ復活を意味するのには曖昧であった。雑誌連載時には *Another Adventure of Sherlock Holmes* の副題が付けられており、この作品で描かれた事件が「最後の事件」以前の落ち穂拾い的な作品なのか、ホームズの復活を意味するのかはっきりしていないからである。「最後の事件」におけるホームズの死が嘘であったことが確定するのは、1903年に『ストランド・マガジン』に掲載された‘The Empty House’を待たなければならない。読者はホームズの再登場を喜びながらも、それが永続的なものなのか、単発的なものなのか不安を抱いたことであろう。つまり『バスカヴィル家の犬』は、ホームズの死と復活のはざまに登場した作品であり、そこに登場するホームズは死者とも生者とも言えない、幽霊のような存在であったのだ。

ところで、なぜ当時の人々はこれほどホームズの死にショックを受け、またその再登場に拍手したのだろうか。この問いに答えるために、Catherine Belsey の論を参照したい。

The project of the Sherlock Holmes stories is to dispel magic and mystery, to make everything explicit, accountable, subject to scientific analysis. (・・・) Holmes and Watson are both men of science. Holmes, the

'genius', is a *scientific conjuror* who insists on disclosing how the trick is done. The stories begin in enigma, mystery, the impossible, and conclude with an explanation which makes it clear that logical deduction and scientific method render all mysteries accountable to reason. (102; italics added)

解決不可能にみえた難事件がホームズによってばかばかしいほど簡単で単純な問題であることが明らかにされるホームズの物語は、ヴィクトリア朝時代に特徴的な、実証科学の力に対する楽観主義を体現しているとベルシーはさらに主張する。このような楽観主義を担ったホームズは、大英帝国の没落が明白となった世紀転換期においてイギリスの多くの読者が感じていたであろう将来への不安をなだめ、失われた安心感を（一時的にせよ）与えてくれる存在であったのだ。ドイツやアメリカなどの新興国の台頭、植民地支配の揺らぎ、社会主義運動や女性参政権要求運動の活発化など、大英帝国の繁栄の陰で抑圧されてきた様々な問題が表面化していたこの時期、多くの読者が感じていた未来への漠然とした不安を、ホームズの一連の物語は払拭してくれていたのだ。「最後の事件」が引き起こした国民的パニックとは、複雑怪奇な事件が、実は合理的に説明可能で解決されるものであることを示してくれた「科学的魔術師（手品師）」ホームズが突然奪われたことへの反応であったと理解すれば、それほど過剰な反応とも言えなくなる。

多くの読者を熱狂させた魔術師ホームズの手腕とはどのようなものだったのか、『緋色の研究』の例で見てみることにしよう。

田中の指摘したように、『緋色の研究』においても事件はまず死体として出現する。ロンドン郊外の寒々とした部屋の描写に続いて、そこに放置された異様な死体が描かれる。途方に暮れる刑事に対し、ホームズはこの事件が他殺であると推理し、犯人は身長六フィート以上の中年男性、赤ら顔で、右手の爪がひどく伸びていると自信たっぷりに予言する。次に、血のついた指で部屋の壁に描かれた文字 RACHE が注目される。最初にこの文字を発見した刑事は、これは犯人が RACEHEL という名前を書いている途中で邪魔が入ってやめたことを示していると解釈する。そしてこの事件が解決したときには、レイチェルという名前の女性に関係していることがわかるはずだと予言する。これに対しホームズは、この文字がドイツ語の「復讐」を意味する語であることを告げる。

結局、この殺人がアメリカでの犯罪に端を発する復讐であったことが分かり、犯人の特徴もホームズが予言したとおりであったので、予言合戦はホームズの完全勝利で終わる。指で「壁に描かれた文字」をめぐる予言というと、突然現れた指が壁に描いた文字をめぐり、バビロニア帝国の崩壊を予言するものと正確に読み解いた旧約聖書「ダニエル書」のダニエルを思い起こさせる。ダニエルが権威をもって王になぞ解きを語ったように、私立探偵にすぎないホームズもこの場面で警察という公的機関に対し、堂々と意見を述べ、それが正確であったことが最終的に証明されるという展開になっている。

『緋色の研究』でホームズが明らかにしたのは、犯人も被害者もアメリカ人であり、犯罪の原因もアメリカにあったということである。つまり日常の中に突然現れた死体が体现する犯罪は、外部から持ち込まれた例外的な事件であるということだ²。そして名探偵の活躍によって、事件は解決し、イギリスの平穏な日常が回復されるというわけだ。ホームズは、殺人とは日常生活という無色の糸かせの中に紛れ込んだ一本の緋色の糸であるとし、その糸を解きほぐし、引き抜くことが自分たちの仕事であると述べている。つまり犯罪とはどこまでも例外的な存在であり、探偵の仕事はその存在を暴き、排除し、平穏な日常を回復することにあるのだ。

事件解決にあたって主導的役割を果たしたのはホームズではなくスコットランド・ヤードの刑事とされるだろうという自分の予言が見事に当たったと、事件解決を伝える新聞記事を読みながら笑うホームズの姿を描いて『緋色の研究』は終わっている。つまり『緋色の研究』において、ホームズの予言は事件の最初から最後までの中していたことになる。結果から原因をさかのぼる推理が確実なものならば、現在を原因としたとき未来は確実に予想できるはずだ。そして『緋色の研究』では一貫してホームズの自信が正しいものであることが実証されている。ホームズの自信に満ちた姿勢に読者は安心し、その科学的捜査の支えとなっている実証科学の確実性への信頼を再確認することになるだろう。

一方、『バスカヴィル家の犬』ではどうだろうか。まず注目されるのは、この作品では死体が直接的に描かれることが（唯一の例外を除いて）ないということである。Baskerville 家の当主の命が次々に狙われるこの事件で、Charles Baskerville の死体については、依頼人の話の中で登場するだけである。次の当主 Henry が死体となることは、ホームズの活躍によって防がれた。唯一の例外が脱獄囚 Selden の死体であるが、このことについては後で論じよ

う。

さらに最後の章で、事件を回想しながら語るホームズは、意図していた殺人が成功していたら犯人はその後どうするつもりだったのだろうかという Watson の質問に対し次のように答えている。

It is a formidable difficulty, and I fear that you ask too much when you expect me to solve it. The past and the present are within the field of my inquiry, but what a man may do in the future is a hard question to answer.
(167)

ここでのホームズは自分の力の限界を明言し、未来が予測不可能であることを認めている点が注目される。『緋色の研究』で自信たっぷりに予言していたホームズとは、なんという違いだろうか。ホームズが初めて登場した『緋色の研究』から、その死を経てあいまいな再登場を果たした『バスカヴィル家の犬』とをへだてる六年間に何が起きていたのだろうか。

II

まず確認しておきたいのは、『バスカヴィル家の犬』においても最初に殺人があり、その犯人が探偵によって明らかにされ、動機と方法も説明されて事件は解決するという探偵小説の定型は守られているということだ。ただしすでに述べたように、『バスカヴィル家の犬』では、冒頭に死体の直接的描写が置かれることはない。バスカヴィル家の当主チャールズの死という最初の殺人事件は、ベイカー街のホームズの下宿を訪れた依頼人 Mortimer によって語られている。しかしモーティマーはチャールズの死を語るのに先立って、原初の殺人ともいべき事件をホームズに紹介している。バスカヴィル家に伝わる古文書によって、バスカヴィル家に伝わる巨大な黒犬の伝説が語られるのである。それは次のようなものだ。17世紀のバスカヴィル家の当主 Hugo が領民の娘に目を付け、屋敷に監禁する。すきをついて逃げ出した娘を追いかける召使たちが、夜の荒野で目にしたのは、恐怖と疲れで死亡した娘の死体と、彼らに先行して追跡していたヒューゴーが巨大な黒犬に食い殺されている現場であった。それ以来、バスカヴィルの一族には巨大な魔犬の呪いがかけられており、夜間、一人で荒野ムアに行ってはならないとこの文

書は子孫に警告して終わっている。

この伝説にホームズは全く関心を示さないが、次にモーティマーが取り出すのは、チャールズの死を伝える新聞記事だ。ここでチャールズが南アフリカでの投機によって巨万の富を得たこと、そして母国に戻った彼が、その財力で衰退しつつあるバスカヴィル家再興を図っていた途上で突然の死におそわれたことが紹介される。ここでもホームズの関心はそれほどでもない。ここまでを整理すると、『バスカヴィル家の犬』で最初に語られる死体は17世紀の死体であり、ついで現代の死体が連続して描かれている。さらにそれらは古文書と新聞という文字化し、再構成された形で描かれている。そしてその物語をモーティマーがホームズとワトソンに語るという形式を取ることで、二重の（小説全体の語り手ワトソンを加えれば三重の）フィルターを経て、殺人事件は読者に語られることになる。こうして古文書が伝える伝説とセンセーショナルな新聞記事というありふれた文学形式によって表現されることで、死は平穏な日常を揺り動かす、その脅迫的な力をそがれることになる。

ところが探偵小説としてのこの作品が始動し、またホームズが俄然興味を示すようになるのは、モーティマーが自分の目にした死体について語るときからである。正確に言えば死体ではなく、死体のそばに巨大な犬の足跡があったという彼の目撃証言からである。これは『緋色の研究』での謎の文字を思い起こさせるエピソードではあるが、モーティマーの有名なセリフ“Mr Holmes, they were the footprints of a gigantic hound!” (20) が読者に与える衝撃は、『緋色の研究』のグロテスクな死体がもたらすショックとは性質が異なるものである。それは、時を隔てた二つの死体を巨大な魔犬の伝説がつないでしまっているという異様な事態に源泉を持ち、伝説の予言が実際に成就してしまったということがもたらす衝撃である。この超自然的要素の介入による殺人というありえない物語がいかにして可能であったかという難問を合理的に解決するというのが、この事件でのホームズが取り組むべき課題である。

さらに『バスカヴィル家の犬』の特異性は、ホームズへの依頼がチャールズの死の解明だけでなく、次の当主ヘンリーに迫る危険を防ぐことにある点である。つまりホームズはこの事件において、過去の犯罪を遡及的に扱うだけでなく、これから起こることが予想される犯罪を未然に防ぐという二重の役割を期待されているのだ。言い換えれば、予言どおりに現実化したチャールズの死体と、現実化することが予想されるヘンリーの死体とのあいだで、

ホームズがいかにして後者の予言の成就を阻むことができるかがこの物語の焦点になるのである。

ここでホームズにとってやっかいなのは、ヒューゴの死という過去とチャールズの死という現在とが時間軸にそって語られることで、ヘンリーの死という未来の事件が不可避のもののように見えてしまうことだ。過去、現在、未来それぞれの死体はそれぞれの語りの中でその例外的特性を失い、一族にかけられた呪いという、ありふれた、またありふれているがゆえに強力な物語配置の磁場の中で簡単にあるべき位置に納まってしまいかねない。しかしここで問題になるのは、因果関係によって整理され、わかりやすく一貫したこの物語は、先祖の犯した罪を原因とする魔犬の呪いという超自然的な伝説に起源を持つということである。一定の説得力はあるものの非科学的なこの物語に挑戦し、20世紀にふさわしい合理的な物語へと書き換えること、それが『バスカヴィル家の犬』においてホームズに課せられた課題である。

“An investigator needs facts, and not legends or rumors.” (134) と述べるホームズは、この事件で一貫して超自然的要素に関心を示さない。その姿勢を支える信念を、ホームズは次のように説明している。

The more outré and grotesque an incident is the more carefully it deserves to be examined, and the very point which appears to complicate a case is, when duly considered and *scientifically* handled, the one which is most likely to elucidate it. (163; italics added)

まがまがしく、ゴシック小説のような装いを見せるこの事件を、ホームズはあくまでも「科学的に」考察し、合理的に説明できるものにしようと試みる。言い換えれば、ホームズの捜査の目的は、一族の呪いによる当主の死という奇怪な物語の書き手は誰か、そしてその目的は何かを明らかにすることである。

最終的にホームズは、バスカヴィル家の屋敷の近くに住む博物学者 Stapleton が実は、バスカヴィル家の一族の血をひく人間であり、魔犬の伝説を利用して当主のチャールズとヘンリーを亡き者にした後、その膨大な財産を手に入れようとしていたことを明らかにし、ヘンリーの命は救われ事件は解決する。ホームズは超自然的な伝説がフィクションであることを見破り、ステイプルトンの欲望という真の原因を正確に見抜くことで、一連の奇怪な

出来事を合理的に説明可能なものへと変容させたのであった。探偵の捜査活動とは「犯人という『他者』の欲望を解釈する営み」(田中195)であるとするなら、『バスカヴィル家の犬』は典型的な探偵小説といえることができる。

III

話を急ぎすぎたようだ。『バスカヴィル家の犬』の冒頭にもどろう。ここでホームズは視覚を使ったトリックをワトソンに試みている。ペイカー街の自室でワトソンに背を向けていたホームズが、ワトソンの心の内を読み取って驚かせるというエピソードである。ホームズの超人的な力を証明するような出来事であるが、実はホームズの目の前にあったコーヒー・ポットに映るワトソンの姿を観察し、推測したにすぎないことをホームズはすぐに明かして、ワトソンをがっかりさせる。このトリックが、見られることなく見るという特権的な位置にホームズがいることで可能になっている点に注意しておこう。これから続く探偵ホームズと犯人ステイブルトンとの戦いは、どちらがこの優位な、見る立場を占有するかにかかっているからである。

たとえばロンドンでの最初の対決の場面で、ヘンリーを尾行する馬車に気づいたホームズは追跡するものの、ステイブルトンを捕まえることも、その顔を確認することもできない。逆に自分の顔をステイブルトンに見られ、自分が事件に関与していることを相手に知られてしまう。一方、ホームズであれば馬車の御者をすぐに割り出すであろうことを予想したステイブルトンは、自分の名前はシャーロック・ホームズだとその御者に言い残して姿を消す。御者からその証言を聞いたホームズはくやしがるがどうしようもない。このエピソードが示唆しているのは、「自分の名前はシャーロック・ホームズだ」という発言どおり、ステイブルトンはこのとき、実際ホームズになっているということだ。常に相手を冷静に観察し、その行動を正確に予測し、先手を打って対応して相手をくやしがらせるのはホームズの常套手段であるからだ。ところがこのとき、観察する人であるはずのホームズが、犯人によって観察され、先手を打たれてしまったのだ。こうして、どちらが見る主体となり、どちらが見られる客体となるかを賭けた最初の直接対決にホームズは不覚を取ってしまったのだ。これからホームズは、ステイブルトンによって奪われた名探偵ホームズの地位を奪還しなければならない。

ロンドンで屈辱を味わったホームズが取った手段は、自らの姿を消すこと

であった。他の事件のためにバスカヴィル家の屋敷のある地方へは行けないという口実で、ワトソンに現地へ行かせ報告を受けるという形を取る。しかし実際は、荒野に点在する古代人の遺跡の一つに潜んで、容疑者として目を付けたステイブルトンの動きをホームズは監視する。こうしてホームズは、油断したステイブルトンに見られることなく彼を観察し、ロンドンでの屈辱を晴らしたのである。ここでホームズが、日用品を届けたり情報収集をさせるためにロンドンから連れてきた少年 Cartwright を “an extra pair of eyes upon a very active pair of feet” (125) と呼んでいることに注意したい。ホームズは、冒頭のエピソードにおけるコーヒー・ポットの役割をカートライトにさせ、自分の姿をさらすことなく観察するというトリックによって、ステイブルトンよりも優位な立場を得ていたのである。

視覚をめぐるパワー・ゲームという観点で言えば、ステイブルトンこそが事件の犯人であることにホームズが確信を抱く場面もそうである。バスカヴィル家代々の肖像画を観察するなかで、その類似からステイブルトンがバスカヴィル家の一員であるとの確証をホームズは得る。肖像画という見られる対象物にステイブルトンを重ねることで、ホームズはステイブルトンの真のアイデンティティーを発見し、対象化することに成功したのである。勝利を確信したホームズが、珍しく興奮してワトソンに語りかけるその場面を見てみよう。

We have him, Watson, we have him, and I swear that before to-morrow night he will be fluttering in our net as helpless as one of his own butterflies. A pin, a cork, and a card, and we add him to the Baker street collection! (140)

ここでホームズは、文字通り「もの」と化したステイブルトンを所有している。とらえられ命を奪われてコレクションに加えられた蝶にたとえられるステイブルトンは、もはや身動きできないのだ。しかしここで注目されるのは、この場面でのホームズがステイブルトンになっていることである。ロンドンでステイブルトンがホームズの名を名乗ったのに対し、今度はホームズが熱心な蝶のコレクターであるステイブルトンの身振りを模倣しているのである。生きている蝶を捕まえ、その命を奪った上でコレクションに加えて眺めることに無上の喜びを感じているらしいステイブルトンの姿に、ホームズ

は自分の姿を重ねている。実際、ホームズは捜査活動を「網を張る」と、昆虫採集にしばしばたとえている。珍しく笑い声を立てるここでのホームズには、ステイプルトンの異様なまでの執念も転移したかのようである。蝶と蛾のコレクションでいっぱいステイプルトンの部屋と犯罪資料のファイルで埋まるベイカー街のホームズの部屋とが一瞬、重ねあわされるような、不気味な描写である。

ホームズはこの発言がはらむ問題に気づこうとはせず、明日の晩までにはステイプルトンを拘束すると予告する。この発言からは、ホームズがすでに自信を取り戻し、名探偵の地位を奪還していることが分かる。常に冷静に対象を観察し、先手を取って相手をコントロールする、いつものホームズにこの時点でもどっていたのである。

探偵と犯人が簡単に入れ替わってしまうという事態は、一見異様にみえる。しかしステイプルトンもホームズも、この事件において、ともに物語をつむぎだす立場にあったことを考えれば不思議でも何でもない。両者の違いは、ステイプルトンがバスカヴィル家にかけられた呪いという伝説を利用したのに対し、ホームズが合理的に説明可能な物語を提示したという違いだけである。

しかしここで問題になるのは、ステイプルトンの物語は超自然の要素が介入するがゆえに偽りであり、ホームズの合理的な物語が正しいという語り手ワトソンによって語られる『バスカヴィル家の犬』の論理を保証するものは何かということだ。もちろんホームズの合理的な物語がステイプルトンの奇怪な物語に対し、説得力において優っていることは明らかだろう。因果関係がはっきりしていて、何よりも単純で理解しやすい物語であるからだ。奇怪な物語を合理的で単純な物語に書き換えることについて、ホームズ自身は次のように述べている。

'I shall soon be in the position of being able to put into *a single connected narrative* one of the most singular and sensational crimes of modern times. Students of criminology will remember the analogous incidents in Grondo, in Little Russia, in the year '66, and of course there are the Anderson murders in North Carolina, but this case possesses some features which are entirely its own. Even now we have no clear case against this very wily man. (145; italics added)

原因から結果へと一直線に進む物語、これがホームズの物語である。そして複雑怪奇な事件は単純で明快な話に変わる。これがホームズにとっての事件解決である。そのうえで、ホームズはこの事件の特異性を奪い、彼の事件簿に収まるコレクションの一つにしようとする。しかしホームズとステイブルトンの同質性が明らかな以上、語り手ワトスンが抑圧する問い、つまりホームズの物語もステイブルトンのものと同様、物語の一つにすぎないのではないか、「探偵自身の幻想のシナリオ」にすぎないのではないかという問いは残る。以前の事件との類似によってこの事件の特異性を薄めようとホームズは努めるが、それもこの根本的な問題から目をそらさせるための方策と考えられなくもない。そして結局のところ、この事件の独自性をホームズは認めざるを得ないのだ。これはステイブルトンを自分の犯罪コレクションに加えてやるというホームズの予言成就の困難さを示すものに他ならない。

IV

次にホームズの「単一の、関連付けられた物語」が完成するために、何が排除されなければならなかったのか考えてみたい。ホームズの物語が圧倒的勝利をおさめるために抑圧された部分についてである。

難波江和英は、推理の最初の段階でホームズがある事実を見落としており、そのことがこの事件で重要な役割を果たす結婚制度についてのホームズの盲点となり、結果として事件解決を遅らせることになったと主張している。それは魔犬の伝説を伝える古文書の最後におかれた、次のような但し書きである。

This from Hugo Baskerville to his sons Rodger and John, with instructions that they say nothing thereof to their sister Elizabeth. (14)

この但し書きが明らかにしている事実、エリザベスというバスカヴィル家の女性の排除である。つまり、この伝説の継承が「バスカヴィル家の嫡子たる男の、男による、男のための継承」(難波江34)であったということを、この但し書きは明らかにしているのだ。バスカヴィル家に受け継がれていく呪いの伝説は、「そのまま家父長制による家督権の継承を表現する物語」(難波江34)であり、女性は家の資産だけでなく、呪いの伝説からも排除されて

いたというわけだ。

確かに、物語から排除され、ほとんど発言も許されない女性たちがホームズ・シリーズにはしばしば登場する。ベルシーも、彼女たちに注目し、ミステリアスで沈黙を守る女性たちにホームズの物語は「取りつかれている (is haunted)」(Belsey104)と指摘している。そしてホームズの科学的捜査によっても解明されない彼女たちの問題は、ホームズの明快な物語に影を落としているとし、結果として“the poverty of the contemporary concept of science” (Belsey106)をうきぼりにしていると論じた。『バスカヴィル家の犬』においても、チャールズとヘンリーをおびき出すための道具としてステイブルトンに利用された Beryl Garcia や Laura Lyons のような女性たちが登場する。しかしホームズが関心を示すのは、彼女たちがどのような役割を事件で担わされたかについてだけであり、事件後の彼女たちへの配慮は見せていない。

またこの作品で唯一、死体となった姿が直接描かれる脱獄囚 Selden は、たまたまヘンリーの服を身につけていたためヘンリーと間違われ、巨大な犬に襲われて命を落とす。ヘンリーの身代わりとなったセルデンの死体を前にしたワトソンは、凶悪犯である彼は法律上、死に値する男であったと片付けるだけである。さらにヘンリーではなかったことにほっとした彼は、自分の胸が“thankfulness and joy”(248)に満たされたと述べている。セルデンの死は、脱獄囚という危険な反社会的存在の消滅として処理されるのである。バスカヴィル家の執事の妻となっていたセルデンの姉が、幼い日の弟のあどけなさを涙ながらに語っても、ホームズは何の関心も示さない。ワトソンも、弟の死を嘆くその姿を見て、“Evil indeed is the man who has not one woman to mourn him”(136)と、いかにも彼らしい常識的、一般的感想を述べるだけである。

ここでベルシーが、ホームズの物語は物言わぬ女性たちに「取りつかれている」と指摘していたことを思い出そう。ホームズの物語に登場するものの、ほとんど発言するも許されない幽霊のような存在は、女性であったり犯罪者であったりしたのだが、同じような例をバスカヴィル家の館の描写にも見ることができる。それはヘンリーとワトソンの前に初めてバスカヴィルの館がその不気味な姿を見せる場面である。

A few minutes later we had reached the lodge-gates, a maze of fantastic tracery in wrought iron, with weather-bitten pillars on either side,

blotched with lichens, and surmounted by the boars' heads of the Baskervilles. The lodge was a ruin of black granite and bared ribs of rafters, but facing it was a new building, half constructed, the first fruit of Sir Charles's South African gold. Through the gateway we passed into the avenue, where the wheels were again hushed amid the leaves, and old trees shot their branches in a somber tunnel over our heads. Baskervill shuddered as he looked up the long, dark drive to where the house glimmered *like a ghost* at the farther end. (57; italics added)

ここに描かれている崩壊しつつある屋敷の不気味な姿は、ゴシック小説の定番である。しかし注目されるのは、時代に取り残され、明らかに衰退の様相を見せている館と新しい建物との対照性だ。先祖伝来の、朽ち果てつつある建物と、先代チャールズが植民地で得た富を注ぎ込んで再建を図った未完の事業とのちぐはぐな対比である。「幽霊のような」という形容からは、すでに歴史的役割を終えていながら現代まで生き続けているカントリー・ハウスのあいまいな存在を読み取ることができる。

初めてバスカヴィルの館を見たヘンリーはぞっとするが、すぐに電灯を導入して陰鬱な雰囲気を変えることを提案する。過去の遺物のような場所がはらむ闇の力に近代のテクノロジーで対抗しようという姿勢は、呪いの伝説に科学的捜査の光を当てようとしているホームズのそれと共通していると言える。ワトソンは、ヘンリーを次のように描いている。

There he sat, with his tweed suit and his American accent, in the corner of a prosaic railway-carriage, and yet as I looked at his dark and expressive face I felt more than ever how true a descendant he was of that long line of high-blooded, fiery, and masterful men. There were pride, valour, and strength in his thick brows, his sensitive nostrils, and his large hazel eyes. If on that forbidding moor a difficult and dangerous quest should lie before us, this was at least a comrade for whom one might venture to take a risk with the certainty that he would bravely share it. (54)

ここで描かれているのは、イギリスの旧家の血を受け継ぎながら、ヴァイ

タリティにあふれた新大陸育ちの「男らしい男」である。世紀末の退廃に染まった貴族ではなく、中産階級であるワトソンからも「仲間」として認められるような存在だ。イギリスの名家の血をひき、ジェントルマンらしい風格を備えながらアメリカ英語のアクセントで話すヘンリーこそは、衰退しつつあるバスカヴィル家に新たな命を注ぎ込み、再生させる役割が期待されていることがこの描写からうかがえる。そしてこの崩れかかったカントリー・ハウスを衰退しつつある大英帝国と重ね合わせてみれば、ヘンリーのバスカヴィル家再興という事業は大英帝国の再建と関連づけることも可能だろう。Joseph Kestner はヘンリーを、Benjamin Disraeli が19世紀半ばに提唱した Young England のプロジェクトと結び付けて論じている³。その計画では、若く賢明な貴族階級のリーダーがイギリス政治の実権を握り、改革を行うことで、国家の安定を取り戻すことが謳われていた。ホームズやワトソンのような中産階級の人々と協力して、ヒューゴーのような墮落した過去の地主階級が残した負の遺産と対決するヘンリーには“a powerful male paradigm as a model for British manhood” (Kestner124) の典型を見ることができるだろう。

対外的にはドイツやアメリカといった新興国の台頭と植民地での反乱、国内的には労働者のストライキや女性参政権運動に脅かされる大英帝国の男性にとって、ヘンリーのような若々しく、かつ世紀末の退廃に染まらない身分のある若者こそ希望の星であったという論はよくわかる。しかし、視点を変えれば、つぎつぎと植民地帰りの人間のエネルギーと財力を吸い取って再生を図るバスカヴィル家のありかたは、人間の血を吸い取って生き続ける吸血鬼を思わせる。幽霊のようなバスカヴィルの館にヘンリーが思わず身震いしたのも不思議ではない。そして再建途上で放棄されたバスカヴィル家の館のちぐはぐな有様は、大英帝国再興プロジェクトの不毛さを象徴するものでもあるだろう。

V

物語の大詰め、事件の概要を把握したホームズは、ヘンリーに夜、荒野を一人で歩かせ、ステイプルトンを罠にかけようとする。ホームズの予想通り、ヘンリーを巨大な犬が襲う。しかしホームズの予測を狂わせたのは、荒野に点在する沼から発生する霧であった。霧によって視界を奪われてあせるホームズであったが、危機一髪のところで犬を倒し、ヘンリーを救うことに成功

する。この場面で、ホームズの予言が絶対確実ではないことを確認しておきたい。確かに犯人はホームズの予測通りに行動したが、霧という自然条件をホームズは予測することも、コントロールすることもできなかったのである。

危ういところを救われたヘンリーはホームズに「あれは何だったのか」と自分を襲った巨大な怪物について問う。ホームズの答えは次のようなものである。

‘It’s dead, whatever it is,’ said Holmes. ‘We’ve laid the family ghost once for ever.’ (152)

ホームズはここで「それ」の正体を明快に答えることができない。そして得体のしれない「それ」を一族に取りついていた幽霊へと取り換え、その幽霊を取り払ったとヘンリーを安心させようとしている。しかしこのホームズの主張の根拠はどこにも示されることはない。確かに、人々を震え上がらせた巨大な犬の正体が、ロンドンの商店 Ross and Mangles でステイブルトンが購入し、鉄道で運んだ犬に蛍光塗料を塗ったものであることをホームズは最後に説明する。つまりおどろおどろしい伝説の魔犬の正体が、都会で売られている商品の一つに過ぎなかったことが解明され、ホームズは、いわば悪魔祓いを行うのである。

しかし本当にバスカヴィル家に取りつく幽霊は永遠に退治されたのだろうか。ステイブルトンを犯罪に駆り立て、長男以外の男性が外国に移住せざるを得なくした相続制度、つまり長男だけがすべての財産を相続する長子相続制の問題をホームズは見ようとしない。さらにヒューゴーの事件が示唆する、支配下の土地と領民の搾取によってバスカヴィル家の繁栄が成立していた歴史的経緯にホームズは目を向けない。さらにチャールズが南アフリカから、ヘンリーがカナダから帰国している事実は、カントリー・ハウスの経済的基盤として大英帝国の植民地の存在を示しているが、この問題にもホームズは触れようとはしない。またヒューゴーに誘拐され、名前すら残さずに亡くなった17世紀の女性だけでなく、ステイブルトンに道具として利用された女性たちもこの作品では、その後を言及されることはないままである。

このようにイギリスの伝統的歴史を支えてきたカントリー・ハウスは、『バスカヴィル家の犬』において様々な人々の欲望を喚起し、そこに関わる人間のエネルギーを吸い取って生き続ける吸血鬼のような存在として描かれ

ているのである。この歴史的に構築され、大英帝国の繁栄を支えてきたこのシステムにホームズは手を出せない。ホームズはステイプルトンを例外的な存在として名指しし、事件の全責任を負わせる。しかしそのステイプルトン自身も底なし沼に飲み込まれたことが推測されるだけで、身柄を拘束できないままで物語は終わる。責任を負わせるべき犯人の身体は消え去ってしまうという、探偵小説としては奇妙に後味の悪い結末となっている。必ず拘束するとしたホームズの予言は外れたわけである。

ここでステイプルトンを飲み込んだとされる沼 Grimpen Mire に注目したい。ワトソンはその不気味な様子を、次のように描いている。

Rank reeds and lush, slimy water-plants sent an odour of decay and a heavy miasmatic vapour into our faces, while a false step plunged us more than once thigh-deep into the dark, quivering mire, which shook for yards in soft undulations around our feet. Its tenacious grip plucked at our heels as we walked, and when we sank into it it was as if some malignant hand was tugging us down into those obscene depths, so grim and purposeful the clutch in which it held us. (155-60)

長年の腐敗物の堆積によって形成された底なし沼は、長い歴史の中で多くの人々のエネルギーを吸い取ってきたバスカヴィルの屋敷と同様、幽霊のように計測不可能で、得体のしれない存在である。ホームズをもってしてもこの沼を対象化し、コントロールすることはできない。そのことは、最後の対決でのホームズの視界を奪い、その計画を狂わせた霧の発生源がこの沼であったことが証明している。またステイプルトンの足取りを追ったホームズ自身が沼に飲み込まれそうになってワトソンたちによって危ういところを救出されるという失態を演じている。ここでもホームズはステイプルトンを模倣しているわけだが、名探偵すら引きずり込もうとする「悪意に満ちた手」を持つ底なし沼とは一体何なのだろうか。

この不気味な沼こそ、ホームズの明快な物語によって排除されたものたちの隠喩ではないだろうか。それはステイプルトンとかモリアティーとか固有名で呼ばれうる存在ではない。ホームズの科学的操作によっても解明できない “the unfathomable mystery of criminality and, ultimately, of evil itself”

(Clausson78)ではないだろうか。ステイブルトンは「悪そのもの」のひとつのあらわれにすぎないのだ。沼と一体となったステイブルトンにホームズは手が出せない。下手に試みると自身の命が危うくなることを、ホームズが沼に落ちて救出されたエピソードは示している。ホームズの明快な物語が成立する過程で生じた残余の集合体がこの定型化を拒絶する沼と解釈できるだろう。

『バスカヴィル家の犬』でのホームズは、怪奇な事件が実は合理的に理解可能なものであることを示した。しかし犯人の死体は行方不明のままである。「最後の事件」でライヘンバッハの滝つぼに沈んだはずのホームズの死体が見つからず、やがて復活の伏線として利用されることになるように、ステイブルトンも逃げ伸びた可能性も否定はできない。しかしホームズはその可能性を認めようとしない。ホームズ自身も沼に飲み込まれかけたように、ホームズにとって最も危険な場所は壮大なライヘンバッハの滝でなく、イギリスの片田舎に潜む、平凡な沼地であったのだ。犯罪者と正常な人間、日常と非日常、さらには善と悪の境界をも無化しかねない不定形の沼に対して、名探偵も無力である。犯人を拘束するという予言は外れ、ホームズがステイブルトンに仕掛けた罠の成功もきわどいものであった。このようにホームズは決して全能の存在ではない。『緋色の研究』での自信に満ちたホームズと、『バスカヴィル家の犬』の最後で未来の予想はできないと自らの限界を認めるホームズとの違いの原因はここにあったのだ。

VI

以上論じてきたように、『バスカヴィル家の犬』の最後は、さまざまな問題を残して終わる。ホームズは確かに事件を解決した。しかしそれはなにを解決したのだろうか。命は救われたものの、事件のショックから立ち直れず、海外へ療養の旅にでるヘンリーが物語の最後に見せる姿は示唆的である。イギリスの伝統に新たな命を吹き込む計画の実現は困難なようだ。

また『緋色の研究』では、犯罪という緋色の糸は例外的なもので、日常から排除できるものであった。しかし『バスカヴィル家の犬』において、犯人はイギリス人であり、しかも名家の一員であった。本当におそろしい人間は、いかにも凶悪な顔をした犯罪者セルデンではなく、にこやかな笑顔の陰に底知れぬ悪意を隠し持つ博物学者、“a small, slim, clean-shaven, prim-faced

man”(64)として描かれているステイブルトンであった。さらに極悪の犯罪者とされる脱獄囚の近親者が、その名家の執事の関係者であったことも判明した。犯罪は外からやってくるものではなく、内から生じていたのである。さらにバスカヴィル家の由緒正しさを誇示する館であるが、その経済的源泉が植民地にあることも言及されていた。イギリスの伝統を体現するカントリー・ハウス自体が、今や、外国との関係抜きには考えられず、さらには犯罪の原因とすら見えてきてしまうのである。

このように『バスカヴィル家の犬』においては、『緋色の研究』では明確であった内と外、あるいは文明と野蛮との境界は、曖昧になり、崩壊しかかっている。こうした問題に対しては、ホームズといえども無力である。犯罪という「緋色の糸」と無色の糸かせとの区別がつかないからだ。ステイブルトンの真実の姿を知ったワトソンならずとも、“something terrible”(126)とつぶやかざるをえない事態であろう。

ではホームズが達成した事件の解決とは何だったのだろうか。ここで作品の冒頭で見せたホームズのトリックを思い出そう。その「魔術」は「詐術」にすぎないことがあの場面ではすぐに明かされていたが、『バスカヴィル家の犬』の事件を見事に解決するというホームズの魔術のような手腕もそうしたトリック、あるいは詐術にすぎないのではないだろうか。つまり世紀転換期の大英帝国が内外に抱えていた巨大で複雑な問題を、バスカヴィル家の財産をめぐる単純な事件にすり替え、ステイブルトンという犯人にすべての責任を負わせることですべてが解決されたように見せかける、という詐術である。しかし『バスカヴィル家の犬』において、ホームズの魔術は詐術であることが冒頭から示され、そこでの解決とはホームズのトリックの結果にすぎないことが露呈している。つまり冒頭のエピソードは、作品全体の提喻として機能しているわけだ。

さらに事件解決という目的のためには、友人でさえ利用するホームズの姿勢も問題になるだろう。カートライトを自身の「目」として使ったホームズは、ワトソンもステイブルトンを油断させるためのおとりとして使っていた。ホームズの命令に従って懸命に働いていたワトソンが、真相を聞かされて、さすがに怒りで声を震わせる場面があるが、無理もないことである。このように人を道具として使い、使われる身のことなど考慮に入れないホームズの姿勢は、自分の野望のために女性たちを利用するだけ利用したステイブルトンとなんら変わるところはない。実際、ホームズはローラ・ライオンズを

「役に立つ女性」「the lady of service」(127)とよんでいる。ここでも探偵ホームズと犯人ステイブルトンとは重なってしまうのだ。

以上の観点から見れば、最後の章で、事件のショックから回復できないでいるヘンリーにホームズが何の興味を示さないのも当然だろう。すでに別の事件に取り組んでいるホームズにとって、バスカヴィル家の事件はすでに解決済みの事件にすぎず、彼の“clear and logical mind”(158)にとって過去の事件にこだわる必要はないのだ。したがって、転地療養を必要とするほどのヘンリーの体調についてホームズが言及することは一切ない。

そうすると『バスカヴィル家の犬』は、結局、懷疑と絶望で終わるのだろうか。ホームズを底なしの泥沼から引き揚げたワトソンのような人物は存在しないのだろうか。ここでヘンリーに付き添って、療養の旅に出るという選択をした医師モーティマーに注目したい。事件の「解決」後、ヘンリーに実質的な貢献をした唯一の人物だからである。大英帝国再建の夢を託された世代の代表がヘンリーであるとするなら、彼の再起が作品の最後に託されるのはホームズではなく、モーティマーであったということになる。このことは何を意味しているのだろうか。

そもそも事件の依頼人であったモーティマーは、時代遅れの骨相学に夢中の、人のいい凡庸な田舎医師として描かれていた。しかし奇怪な事件を理解できず、途方に暮れてホームズのもとを訪れたモーティマーが発した、“I don't know what to believe”(23)という言葉が、この作品が暗示する問題の大きさ、複雑さを考えたとき、最も適切な発言であったとすることができる。そしてその時、モーティマーがホームズに語った言葉、“There is a realm in which the most acute and most experienced of the detectives is helpless”(22)、が真実であったことが最後に分かる。モーティマーのこの予言にこそホームズは耳を傾けるべきであったのだ。

さらに、モーティマーの論文の一つが‘Do We Progress?’(6)と題されているのも、偶然ではないだろう。このタイトルはヴィクトリア朝の進歩史観を真っ向から問うものである。また実証科学の成果である様々な技術革新が戦争に利用されたとき、どのような災厄をもたらすかを「実証」してしまった第一次世界大戦を予言しているかのようなのである。彼のステッキをただけでモーティマーの性格を、“amiable, unambitious, and absent-minded”(6)と推測し、実際、その予言どおりであったことを証明したホームズの手腕はたいしたものである。しかし科学的知見の拡大、技術の進歩が人間の進歩を意

味するのか、モーティマーの論文タイトルがあられもないほど無造作に問うている問題、「われわれは進歩しているのだろうか」、にホームズは目を留めようとしない。どれほどすぐれた探偵であっても手を出せない領域があるというモーティマーの警告にもホームズは耳を傾けなかった。ホームズの明快で、読者に安心感を与える物語はモーティマーの懐疑を無視することによって成立していたのだ。しかし二十世紀は、ホームズが体現する実証科学に対する信頼が揺らいだ時代である。二十世紀小説において主人公の位置を占めていくのはホームズのような例外的な人物でも、ヘンリーのような男らしい男でもない。それはモーティマーのように平凡で、「人のよい、野心を持たず、ボケっとしたような人物」になるだろう。そして戦争の大量殺戮によって荒廃した世界の再建は、そうした凡庸な人物たちに託されるのである。

おわりに

その死と復活の間に登場した『バスカヴィル家の犬』において、ホームズは超自然的要素を排除し、合理的に事件を解決することに成功した。しかしその過程で、幽霊のような屋敷や不気味な沼が表象する巨大で、複雑な問題は解決不可能なものとして露呈してしまった。ヘンリーによるバスカヴィル家再建も成就せず、彼のような若い男性リーダーによる大英帝国再建の夢も実現は怪しそうだ。『バスカヴィル家の犬』は、「空き家の冒険」において本格的復活を果たすことになるホームズを、大英帝国再建という不可能な夢を読者に見させるために、ドイルが死者の国から復活させるための舞台であった。しかしホームズ自身は、バスカヴィル家の屋敷のように、その試みのむなしさを体現する空虚な幽霊にすぎないことをこの作品は示唆している。

ここで『バスカヴィル家の犬』の最後の場面に注目してみよう。『バスカヴィル家の犬』は、ホームズがワトソンを劇場に誘う場面で終わっている。その演目はオペラ *Les Huguenots* だ。それは聖バーソロミューの虐殺を背景に、人間の裏切りや狂信が描かれる Giacomo Meyerbeer (1791-1864) の作品である。この “the inexplicable darkness of the human heart” (Clausson82) を描いたオペラを、よりもよってホームズは選択したのである。洗練された文化の典型といってもいい、グランド・オペラという形式によって人間の心にひそむ野蛮な暗部を描いた『ユグノー教徒』は、探偵小説という形式を取りながらその限界を明らかにした『バスカヴィル家の犬』の隠喩とみなす

ことができよう⁴。もちろんホームズがこのオペラに何を見出すのかはわからないし、音楽に陶然となっているだけのホームズの姿も容易に想像できる。しかし名探偵が見ようとしなかった問題、あるいは彼の明快な物語が成立するために排除された複雑で巨大な問題が、オペラという形式を通じて舞台上で展開されるであろうことを読者は推測することができるのだ。

ホームズという絶対的なヒーロー抜きで、単身、バスカヴィルの屋敷に乗り込み、複雑怪奇な事件と直面しなければならなくなったワトソンは、“Life has become like that great Grimpen Mire, with little patches everywhere into which one may sink and with no guide to point the track.” (72) と嘆いていた。危険な底なし沼のありかを示す表示も、導いてくれるガイドもない「荒地」⁵が日常となる20世紀の現実が、Thomas Stearns Eliot (1888-1965) によって文学的表現を取るのはまだ先かもしれない。しかしホームズが体現するヴィクトリア朝の価値観を覆す危険な存在であり、名探偵をも飲み込もうとする沼の存在を『バスカヴィル家の犬』は明るみに出した。さらに大英帝国の心臓部であり、文明の中心であるはずのロンドンにも、さらにはオペラという文化の華にも、この恐るべき沼は潜んでいたのだ。この点で『バスカヴィル家の犬』は、二十世紀小説としての相貌を明らかにしている。『バスカヴィル家の犬』は、『闇の奥』とまさに同時代の作品だったのである。

注

1. 探偵小説と推理小説のジャンルとしての違い、歴史的経緯については本稿では論じず、探偵小説で統一することにする。
2. Ronald Thomas は『緋色の研究』が二部構成になっていることは、“the conflict within the narrative between England as a civilizing influence in the world and America as a subversive, criminal-breeding ground” (228) を反映していると指摘している。
3. ヘンリーの “a reformed aristocracy” としてのあり方については Kestner 123-4 を参照。
4. 『バスカヴィル家の犬』における『ユグノー教徒』の意義については Clausson の指摘による。
5. T.S.Eliot の *The Waste Land* は1922年の出版。また彼は *East Coker* (1940) において “grimpen” を普通名詞として用いている。

引用文献

- Belsey, Catherine. *Critical Practice*. London: Routledge, 2002.
- Claussion, Nils. "Degeneration, Fin-de Siecle Gothic, and the Science of Detection: Arthur Conan Doyle's *The Hound of the Baskervilles* and the Emergence of the Modern Detective Story" in *Journal of Narrative Theory* 35.1 (Winter 2005).
- Doyle, Arthur Conan. *The Hound of the Baskervilles*. Oxford: Oxford UP, 1993.
- Kestner, Joseph. *Sherlock's Men: Masculinity, Conan Doyle, and Cultural History*. Aldershot: Ashgate Publishing, 1997.
- Thomas, Ronald. *Detective Fiction and the Rise of Forensic Science*. Cambridge: Cambridge UP, 1999.
- 田中純『都市表象分析Ⅰ』INAX 出版、2000年。
- 難波江和英「シャーロック・ホームズの洞察と盲点：『バスカヴィル家の犬』における結婚の制度」『神戸女学院論集』(43・2)、1996年。
- ノウン、グラハム『シャーロック・ホームズの光と影：ホームズ100年、その生涯と時代』東京図書、1988年。
- モレッティ、フランコ『ドラキュラ・ホームズ・ジョイス：文学と社会』植松みどり他訳、新評論、1992年。